

## 透明な壁を崩す一步

守山南中学校二年 牟禮 翔

私が「部落差別」という言葉を初めて意識したのは、学校の授業のことでした。それまでの私にとって、地域による差別は「遠い昔の身分制度の話」という、終わった出来事に過ぎませんでした。しかし、先生が語ったのは、「今もなお、私たちのすぐそばで続いている差別」の実態でした。それを聞いた時、私は言葉にできない衝撃を受けたのを覚えています。

かつて、住む場所や仕事によって決められていた不当な身分制度は、明治四年に行われた「解放令」によって法律の上では廃止されました。しかし、制度が消えても、人々の心の中に染み付いた「自分たちとは違う」という偏見や避けようとする意識は、百五十年以上の時を経た現代社会にも、形を変えて生き続けています。被差別部落出身であるという、その人が選んだわけでも変えられるわけでもない「生まれ」という背景だけで、結婚を反対されたり、就職で不利な扱いを受けたりする。あるいは、根も葉もない噂を立てられる。この事實は、日本社会が抱え続けている根深い問題です。情報化が進み、個性が大切にされる今の時代においても、生まれによって人の価値を決めつけようとする古い意識が、私たちの社会の中にひっそりと潜んでいるのです。

部落差別の最も恐ろしい点は、その「見えにくさ」にあります。特に私たち若い世代にとって、実際にその差別を体験したことがなければ、それはどこか「遠い話の世界」のように感じられがちです。しかし、差別は決して消えたわけではありません。それどころか、

インターネット上の匿名性の陰で、特定の地域を中傷するような書き込みがされたり、何気ない日常会話の中に「自分たちとは違う人たち」という境界線を引くような言葉が混ざったりしています。それは、誰かの心を深く傷つけているのです。私は自分に問いかけてみました。「自分は知らないうちに、誰かを傷つける側に立っていないだろうか」と。何も知らずに黙って過ごすことも、時には差別を許してしまうことにつながるのだと気づかされたのです。

では、私たちはこの問題をどう乗り越えていくべきでしょうか。まず必要なのは、「正しい知識を知ろうとすること」です。歴史として終わらせるのではなく、今、何が起きているのかを知る。偏見に基づいた言動に対して「それはおかしい」と気づくための心のアンテナを磨くことが、差別をなくすための第一歩となります。そして何より大切なのは、「その人自身と向き合う」姿勢です。出身地というラベルではなく、その人の個性や優しさ、努力している姿を見る。自分とは違う立場にある人の痛みを想像し、それを自分のことのように考える力を持つことが重要です。

部落差別をなくすことは、単に過去のあやまちを正すだけのものではありません。それは、私たちが生きる未来の社会を、誰もが「生まれ」に縛られず、自分らしく安心して暮らせる場所に作り替えていく挑戦です。差別のないゴールは遠く感じるかもしれませんが、もし、まずは自分の身近なところから偏見を持たずに人と接し、差別に繋がる言葉に対して「それは違う」と声を上げる勇気を持つこと。この小さな、しかし確かな一歩こそが、長い年月をかけて築かれた「差別」という名の透明な壁を崩す力になると、私は強く信じています。